

母と語る

(2)

倉橋惣三

○わが子を丈夫にしたい。よい子にしたいとは、誰れも思うことである。こうも、あゝもと、それ／＼の希望があるとして、つまり自分の欲する理想に向つて、わが子を育てあげようとする。それが親の教育目的となり、親の熱心となる。それがはつきりとし、充分強くてこそその家庭教育である。どうにでもなるようになれといつた目あてのない仕事ではない。

○しかし、それは教育の目あてであつて、着手ではない。ゆくては何もめざそうとも、出發は足もとからである。教育の出發は子どもからである。教育の着手は、子どもからである。その正しい出發、正しい着手なしに正しい教育は出來ない。どう仕あげたいかは親の勝手としても(その勝手もなか／＼思う通りに出來るものではないが)出發や着手は、親の勝手にならない。子どもはそれ／＼ちがうからである。その子を育てるのである以上、その子がどんな子かをよく知らなくては、向うから見て、子どもを引こばつてゆくようなものである。それでは目あてはまつくらではないにしても、踏み出しまつくらである。

○子どもと一口にいうけれど、それ／＼の持ちまゑがある。

同じわが子だからとて、兄と弟、姉と妹とは、體質も性質も同じではない。それを一つなみに考へて、正しい育て方が出來る筈はない。とんでもない間違ひがそこから起る。わが子はこうありたい、こうである筈だときめてかゝる親に、この間違ひが案外多い。

○子どもの研究ということに二つの大きな方面がある。子どもというものの身心の發達の法則を研究すること、子どもの中のいろ／＼の相違を研究することである。普通にいう兒童研究は主として前の方面で、これが教育の方法を正しくするために大切なのはいうまでもない。しかし、それだけでは足りない。そこで、個性の心理學とか、體質の生理學とかいうことが、盛に研究されるようになった。この知識をもととしてこそ、眞に、わが子の教育が科學的に正しく行われる譯である。たゞこういう研究で、子どもの一人々々の相違を、すぐに優劣の差と考へたりすることが普通であり、親心として一層そうなり易いが、そんなに直ぐ心配したり喜んだりしないで、あるがまゝの事實として、先ず正確に知ることが大切である。よくなり悪くなるのは、あとの教育の結果である。その教育の前に、教育の正しい出發のために、先ず、わが子を知るのが研究である。遠慮なく申せば、いままで、親にこの研究が足りなかつた。或は、そういうことに少しも考慮しなかつたり、或は獨斷できめてかゝつたり、おそろしやおそろしや、あぶなや／＼である。(本誌先月號と本月號の「講座」は、この研究のためのものである。是非精讀されたい。)